

ふるさとテレビNEWSの 琵琶湖疏水の散歩道

08 - 08 - 19

第14報 疏水分線・鹿ヶ谷通の散策

南禅寺の北門（大寂門）を出て、銀閣寺につながる今出川通まで南北に走る道路を「鹿ヶ谷（ししがたに）通」というが、その東側を「哲学の道」、西側を「白川通」が南北に走っており、鴨川以西に住む人には「鹿ヶ谷通」は馴染みの少ない道かも知れない。しかしながら、鹿ヶ谷通と哲学の道の間隔は平均100m以下であり、鹿ヶ谷通にも観光スポットがあるので、哲学の道と組み合わせると楽しむことができる。

南禅寺の大寂門を出て、塔頭である正的院（左側）と龍淵閣（右側）を過ぎると、左側に野村證券グループを築き上げた野村徳七（得庵と号す）のコレクションを展示する「野村美術館」と別邸の「碧雲荘」が存在する。



数奇屋風の野村美術館の正面写真



トップクラスの近代庭園がある碧雲荘

野村美術館は、今年25周年を迎えた比較的新しい美術館で、茶の湯と能に関するトップクラスの逸品が展示されている。北隣りの碧雲荘は、野村得庵が大正6年(1917)から11年かけて造成し、昭和3年に完成した面積6000坪の別邸である。

庭園は七代～八代・小川治兵衛の作庭で、茶室や能舞台を含む17棟の建築物は、平成16年(2002)に国の重要文化財に指定されている。しかしながら、この碧雲荘は通常非公開であり、特別公開の機会を待たねばならない。野村美術館と碧雲荘の敷地の間を、疏水分線の扇ダムから放水された余剰水が1m幅の急流となって鴨東運河に向かって流れている。

この道を北に進み、若王子神社（哲学の道の南口）に右折せずに進むと、住友財閥・住友家の集めた美術コレクションを保存するために昭和 35 年（1960）に設置された「泉屋博古館（せんおくはくこかん）」がある。泉屋とは江戸時代の住友家の屋号である。

この収蔵品は、住友家第 15 代当主・住友吉佐衛門が収集した中国古代青銅器類と、その長男・住友寛一の収集した中国書画が中心に展示されている。



泉屋博古館の正面玄関風景



鹿ヶ谷通に面した外部庭園

所蔵品は、国宝 2 件・重文 17 件とレベルの高い逸品であるが、見学は 3 月中旬～6 月、9 月～12 月中旬に限定されている。庭園は第 11 代小川治兵衛の作庭で、屋外は無料公開されている。鹿ヶ谷通の向い側には、大正 9 年(1920)に造営された住友家の鹿ヶ谷別邸「有芳園」がある。約 3000 坪の敷地であるが、特定の場合を除いて一般には公開されていない。

鹿ヶ谷通と今出川通の交差点の左手に、京都画壇の重鎮であった橋本関雪が 30 年かけて造営した「白沙村荘（はくさそんそう）」が存在する。関雪がこの地を選んだときは、道路より低い水田地帯で、盛り土で造園している。8 回にわたり周辺の土地を買い足して、総計 3400 坪となっている。このうち約 2000 坪の庭園部分は、平成 15 年（2003）に国の名勝に指定されている。その特徴を過去の資料より引用列記すると、

- 1) 白沙村荘の名前の由来は、近在の村落がそばを流れる白川から白砂を採取する事を生業とし、白砂村と呼ばれていたことからである。
- 2) 関雪が大作を描くために造った存古楼（アトリエ）の前にある芙蓉池には疏水分線から水が引かれていたが、途中から地下水に切り替えられ現在に至っている。
- 3) 庭園の設計は、一草・一木・一石に至るまで関雪が関与し配列したと云われ、画家であった関雪の最大の絵がこの庭園とも云われている。カメラを構えて庭園を覗くと、すべての場所が一枚の絵であり、全く隙がない。
- 4) 庭に配置されている塔・灯籠・敷石などが約 180 点あるが、歴史・形容面から一級品であり、「石造物博物館」と呼ばれている。

5) 庭園は池泉回遊式と枯山水式の両面があると云われているが、水の導入部のせせらぎ演出や。敷石に加工石の採用など近代庭園の面影も観察される。

白沙村荘の見学記はホームページで紹介するので、代表的な写真2枚を添付する。



与彌夫人のために造った茶室「問魚亭」



芙蓉池に配置された渡り石と加工石

バス以外に便がないので訪問客も少ないが、地下鉄・京阪「蹴上駅」から歩いても充分に楽しめる距離にある。一つの楽しみ方として、国の名勝に指定されている無鄰菴・平安神宮神苑を見学してから、哲学の道を歩いて白沙村荘を見学する「三名勝めぐり」をすれば、明治～大正時代の造園様式の概略を楽しむことができる。

また、京都には財閥系の趣味人がコレクションした博物館が多く存在するので、今回紹介した「野村美術館」や「泉屋博古館」なども訪ねてほしい。庭園・美術館・博物館の見学の場合は、事前に概要を把握してから訪問すると、理解度が数倍増加する。出来ない場合は訪問の数を増やすことである。何回訪ねても新しい発見があるものである。

関連ホームページ http://www.geocities.jp/biwako_sosui/

琵琶湖疏水の歴史観光開発を推進する 近代京都の礎(いしづえ)を観る会

会長 高桑暉英